



ンボモ村便り



コンゴ共和国オザラ・コクア国立公園のンボモ村より

第2回

～キャッサバ芋の収穫、若者塾もスタート～

萩原幹子（JWCSプロジェクトスタッフ）
2022年12月



1. マルミミゾウの畑荒らし防御柵

（公益信託地球環境日本基金助成）

ゾウの畑荒らしがひどくなって数年、現在も畑を耕している人たちは、夫や息子などの男手があって毎晩畑に寝泊まりしてゾウを夜に追い返すことができる世帯に限られています。未亡人や独身女性は、畑を耕作することをあきらめてしまっています。そんな中、昨年プロジェクトで植えたキャッサバ畑は無事「防御柵」によってゾウから作物を守り通し、70名以上のンボモ村の女性たちに売ることができました。彼女たちはキャッサバ芋を買って、ちまぎや乾燥芋に加工して売ること、生活の糧を得ています。収穫による売上金は同じ場所にまたキャッサバ芋とトウモロコシを植えるために使い、継続して、防御柵によってゾウの被害無く農業ができることを村人に示していきます。

私たちは引き続き、希望する村人に廃油と唐辛子の防御柵を設置していますが、国立公園当局がいよいよ電気柵設置の実現に動き出しました。5km四方、20km長の柵をンボモ村を中心ににして設置し、村の周辺で耕作する畑が守られるようにするものです。しかし、工事開始は6月からと言われていたのが10月になり、やっと設置するルートのを切り開く作業が始まったものの、電線の設置が2か月たった12月になっても始まらず村人たちはなかなか安心することができていません。

本プロジェクトの防御柵の具体的な設置方法については、今回のワシントン条約締約国会議に参加していたアフリカゾウ・アジアゾウの生息国の政府代表たちやNGOにブリーフィングペーパーを配って情報提供しました。他の地域でのゾウの畑荒らし対策に役立てばと思います。



トラックで市場へ運び出して売ったキャッサバ芋

2. 若者による野生動物と共存する村づくり

（プロ・ナトゥーラ・ファンド協力型助成）

プロジェクトを開始するにあたって、村の長老や4つある地区の地区長たちと話をするとともに、ンボモ村の若者たちとも少しずつ話をしました。若者から村づくりをするというのはいいプロジェクトだ、と皆喜んでくれるのですが、若者たちの抱える問題もだんだん明らかになってきました。村の若者の多くは仕事につながる技能がなく、仕事があるなら何でもやる、という姿勢で、その日その日にお金が払われる仕事を探しています。農業は収穫まで働いてやっとお金が得られるのですが、ゾウのせいでやる気がないのです。

そこで、防御柵でゾウから畑を守り、3か月で収穫できて現金収入になる作物を植えてみることを提案し、やる気がある若者を各地区長に4名ずつ紹介してもらいました。作物は、小中学校の前で朝食として煮たものが売られている黒目豆、サツマイモ、ピーナツ、ポップコーン用のトウモロコシなどを選び、村に駐在する政府の農業部長に植え方を教えてもらいました。どれも村で食べられているものですが、村内ではほとんど栽培されていないのです。

選ばれた若者の一部は気が変わってしまったり村から出ていったりしてしまい、別の若者を探すというハプニングもありましたが、植付け時期である雨季に無事植えることができました。現地スタッフのジャン・シャルルさんからは特に黒目

豆の生育が良いと報告が来ています。まずは「何か良さそうなことをやっているな」と見せることが大事だと、同じく現地スタッフのボンゴさんもがんばっています。



順調に育つ黒目豆



村から畑への移動に欠かせないオートバイをプロジェクトで購入

ゾウとの共存のためのツールボックス

～ワシントン条約第19回締約国会議のサイドイベントより～

IUCN（国際自然保護連合）のアフリカゾウ専門家グループと、ケニアを拠点とするSave the ElephantsというNGOの共催イベントが会議の休憩時間にありました。今やアフリカゾウの問題は、密猟による生息数の減少よりも、ほとんどすべての生息国で発生している人間との対立（コンフリクト）のほうが深刻化しているということです。コンフリクト問題はもう20年以上前から研究され、各地で対策が実施されてきているものの、それらを集約した、コンフリクトに直面する生息国の住民や管理当局にとって役立つ形の情報がありませんでした。そこで、イラストを多く盛り込んでわかりやすく書かれた、ゾウとの共存のためのさまざまな方法を紹介したツールボックスが数年かけて作成されました。

中でもハチの巣箱を使った方法は、特に畑荒らし問題に有効と注目されています。ゾウが畑に進入しようとする、約20メートルごとにロープでつなが

れた巣箱が揺らされ、ハチが出てきてゾウを不快にすることによって、ゾウの畑への進入を防ぐのです。これは蜂蜜も採れて農家に収入をもたらす、非常にいい方法とされていました。ところが、今年ケニアは大干ばつに見舞われ、ハチが平原の畑から湿気のある山の上のほうへ行ってしまったそうです。今のところゾウは畑に進入してはいないようですが、ハチを呼び戻すために餌を用意する計画があるとか。このツールボックスはサバンナゾウが対象で、熱帯林に生息するマルミミゾウでは試すことができない方法、試してうまくいっていない方法も載っていました。サバンナと熱帯林では環境がとにかく異なるのです。

ほかにアジアゾウのサイドイベントもありました。アジアゾウ生息国13か国が4月にネパールで集まり、皆で協力して保全を強化していこうという「カトマンズ宣言」が発表された報告でした。

HOME ABOUT THE TOOLBOX TOOLBOX INDEX SIGN KEY



ツールボックスのウェブサイト
<https://ste-coexistence-toolbox.info/en/>



オザラでも試されたハチの巣箱。ハチが入らなかった